

祠山張大帝考 : 伽藍神としての張大帝

著者	二階堂 善弘
雑誌名	関西大学中国文学會紀要
巻	28
ページ	155-167
発行年	2007-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/867

祠山張大帝考

——伽藍神としての張大帝——

二階堂 善 弘

前 言

祠山張大帝は、かつて江蘇・浙江・安徽一帶の地方において、非常に盛んに祭祀された神である。特に太湖の周辺に廟が多く存在した。その祭祀の中心となるのは、安徽広徳にあった祠山廟であった。『西湖二集』には「祠山張大帝，天下鬼神爺」¹⁾と書かれ、『明史』礼志にも「祠山広恵張王渤」²⁾とその名が記されるほどであり、当時信仰が非常に隆盛であったことがうかがえる。その号から山の神であると考えがちであるが、その性格はむしろ水神の範疇に属すると言える。

この張大帝については『三教搜神大全』に記載があり、また趙翼が『陔余叢考』において考証を行っている。そのため民間信仰の分野において全く注目されていないというわけではない。一方でこの神が招宝七郎とともに、日本の禅宗系の寺院で伽藍神として祭祀されていることについては、これまであまり注意されてこなかった³⁾。小論では、特に祠山張大帝の伽藍神としての性格について取り上げ、さらに水神としての機能についても併せて考えてみたい。

1. 祠山張大帝について

祠山張大帝は姓を張、名を渤といい、漢代の人であると伝えられている。『三教搜神大全』には、次のような伝が載せられている⁴⁾。

祠山聖烈真君は、姓を張、名を渤、字を伯奇といい、武陵龍陽の人であった。父を龍陽君といい、母を張媪といった。(略) 懐胎すること十四ヶ月、漢の神雀三年二月十一日夜半に張渤を生んだ。張渤は長じて雄偉な貌であり、寛仁大度にして、感情を表に出すことが少なかった。身長は七尺で、鼻が高く美髯あり、髪を垂らせば地に届いた。そして水火の術に通曉していた。ある時、張渤に向かって神が現れ、「この地は荒僻にして、家を建てるところではない。他の場所に行くように」と命じた。時に神獸が前を導いたが、その形は白馬のようで、その声は牛のようであった。張渤は夫人李氏と共に東のかた呉の会稽に遊び、浙江を渡り、苕雲の白鶴山に至った。山には四つの河が流れ、その流れは山の下で会した。張渤公はそこに居住することにした。(略) 唐の天宝年間に、祈雨において靈驗があり、始めて水部員外郎に任ぜられた。また「横山」を改めて「祠山」とした。唐の昭宗は司農少卿の位を贈り、金紫を賜った。唐の景宗は「広徳侯」に封じた。南唐においては、司徒とされ、「広徳公」に封じられた。後晋では「広徳王」とされた。宋の仁宗は「靈濟王」に封じた。寧宗の代に至り、号を加えて八字の王とした。理宗の淳祐五年、改封して「正佑聖烈真君」とした。咸淳二年十二月十二日に至り、加封せられて「正佑聖烈昭徳昌福真君」となった。

(祠山聖烈真君、姓張、諱渤、字伯奇、武陵龍陽人也。父曰龍陽君、母曰張媪。(略) 懐胎十四個月、当西漢神雀三年二月十一日夜半生。長而奇偉、寛仁大度、喜怒不形於色、身長七尺、隆準美髯、髪垂委地、深知水火之道。有神告以地荒僻、不足建家、命行。有神獸前導、形如白馬、其声如牛。遂与夫人李氏東游呉会稽、渡浙江、至苕雲三白鶴山。山有四水、会流其下、公止而居焉。(略) 唐天宝中、禱雨感応、初贈水部員外郎、即横山改為祠山。昭宗贈司農少卿、賜金紫。景宗封広徳侯。南唐封為司徒、封広徳公。後晋封広徳王。宋仁宗封靈濟王。至寧

宗朝，累加至八字王。至理宗淳祐五年，改封正佑聖烈真君。至咸淳二年十二月十二日，準告加封正佑聖烈昭德昌福真君。）

むろん，この説話はあくまで伝承にすぎない。「神雀」という年号は漢の時代には存在しないが，恐らくは漢の宣帝の神爵年間を指すと思われる。

『祠山志』⁹⁾を見ると，まさにそのように書かれている。とはいえ，この記載が甚だ信憑性を欠くものであるのは確かであろう。なお『祠山志』巻一には顔真卿書という「横山廟碑」の文を引用するが，その中では，張大帝の先祖が張乗という名で，禹の治水の時に功績のあった者であると記す。張大帝の伝承はこの他にも異伝があり，後漢の張湯の子で張安世であるという話もある。総じて史書には，張渤に関する信頼すべき記載は見あたらないと言ってよい。

さて清の趙翼はこの神について，『陔余叢考』で「祠山神」という一節を割いて考証している¹⁰⁾。

俗に祠山神を祀り，祠山張大帝と称する。王世貞の『宛委余編』には『酉陽雜俎』を引いて言う。天帝の劉翁なるもの，張翁を憎み，これを殺そうとした。張翁は劉翁に酒を飲ませて酔わせ，龍に乗って昇天して取って代わった。(略)また『殷芸小説』には次のような話がある。周興死するや，天帝は興を召して升殿させた。周興はひそかに左右の者に問うた。「この方が古の張天帝でありましょうか」。答えて言う。「古の天帝は已に仙去され，この天帝は曹明帝であられます」と。この話は張大帝の証として挙げられるが，これはたまたまその「張」の一字が合っただけのことである。これを引いて証とするのは，『酉陽雜俎』や『殷芸小説』がもとより荒唐無稽な話ばかりなのを知らないのだ。その所謂「張天帝」というのは，昊天上帝を指して言うのであって，この祠山張大帝とは関わりない。

(俗祀祠山神，稱為祠山張大帝。王弇州『宛委余編』引『酉陽雜俎』，天帝劉翁者，惡張翁，欲殺之。張翁具酒醉劉翁，而乘龍上天，代其位。(略)及『殷芸小説』，周興死，天帝召興升殿，興私問左右曰，是古張天帝耶。答曰，古天帝已仙去，此是曹明帝耳，云云。以為張大帝之証。此特因一張字偶合，故引之以實其說，殊不知『酉陽雜俎』及『殷芸小説』固荒幻不經，即其所謂張天帝者，亦指昊天上帝言之，而于祠山無涉也。)

まず『酉陽雜俎』『殷芸小説』などに見られる「張天帝」とは昊天上帝のことを指し，この祠山張大帝とは関係が無いと指摘する。一般に天帝や玉皇大帝の姓を「張」とするのは，どのような根拠があつてのものか不明であるが，一応『西遊記』などにも見えているものである⁷⁾。祠山張大帝が本来の称号としては「王」号，或いは「真君」号しか持たぬのに，「大帝」と称されるのはこの張天帝との混同があるかもしれない。趙翼は，また張大帝の信徒が豚肉を食さぬことも記す⁸⁾。

程榮の『三柳軒雜識』に，広徳の祠山神は，姓を張といい，豚肉を食すのを避けるとある。また『祠山事要』を引いて言う。張王は始め長興県から聖瀆から広徳に流れを通じさせようとし，変身して猪となり，陰兵を駆使して開鑿を行った。夫人の李氏がこのさまを目撃したため，その工事を途中で止めた。しかしこれよりその祭祀には豚肉を避けるようになったのである。(略)また『文献通考』には，祠山の神は広徳にあり，その土地の者は多く耕牛をもってその進物となしたとある。

(按程榮『三柳軒雜識』広徳祠山神，姓張避食豕。而引『祠山事要』云，王始自長興県疏聖瀆，欲通津広徳，化身為豕，縱使陰兵。為夫人李氏所覘，其工遂輟，是以祀之避豕。(略)『文献通考』，祠山神在広徳，土人多以耕牛為献。)

伝承によれば、張大帝は猪に姿を変えて河を開鑿したと伝えられ、そのために信徒は豚肉を食するのを避けるとある。一方で、張大帝の祭礼には多量の牛を消費したことを言い、『宋史』范師道伝に「広徳県の張王廟にては、民は年ごとに神を祀り、牛を殺すこと数千、師道至ってこれを禁絶す」とあるのを引く⁹⁾。このように張大帝の祭礼は牛と密接な関係を持つという一面がある。こういった面では、かなり特殊な信仰を有するものと考えてよいだろう。なお、牛に関わる祭祀については、京都の広隆寺に祀られる摩多羅神を想起させるところもある。

またその廟会は旧暦二月八日に行われたとする。これは先に見た『三教搜神大全』が二月十一日誕とするのと些か異なるが、近代に至るまで、張大帝の祭日は二月八日であるとされている。張大帝を祀った張王廟は、江南一帯に広く分布していたようであり、「張王廟」なる地名としてもよく見るものである。とはいえ、張姓は中国ではありふれたもので、張王廟に祀られる神は三国の張飛であったり、また元末の群雄の一人張士誠であったりすることもあり、すべてが張渤の廟というわけではない。記録によれば、無錫や上海で祭祀が盛んであったようであるが、現在ではその信仰はかなり衰えているものと考えられる。

なお、道教の雷法における重要な経典である『道法会元』¹⁰⁾には、張大帝を中心とした法術が採録されている。すなわち卷百三十の「北真水部飛火擊雷大法」と卷百三十一の「石匣水府起風雲致雨法」である。そこでは張大帝は水部の神とされている。当時の道教においては、積極的にこの神の信仰を取り込んだものと推察される。この記載で注意すべきは、張大帝よりもその配下の神である。

祠山正佑聖烈真君張渤

左衛大將軍丁聖者曠 右衛大將軍壬聖者游 先鋒報応大將軍方通

そもそも祠山張大帝は眷属の多い神で、『祠山志』などによれば、二夫人・五王子・一王女・九王弟・八王孫があるとされる。さらに配下の将としては、龍神の顕濟龍王・広淵侯、及び李助順王・方広濟侯がある¹¹⁾。『三教搜神大全』では配下の将を『道法会元』と同じく「佐神丁壬二聖者・打拱方使者」とする¹²⁾。眷属の種類は、恐らく『道法会元』や『三教搜神大全』に記載されるものが、古い伝承を反映しているものと推察される。

2. 伽藍神としての張大帝

張大帝が日本の禅宗寺院において、伽藍神として祀られることについては、禅学や美術史研究の立場から指摘がある¹³⁾。すなわち、現在張大帝を祀る寺院は、鎌倉では建長寺・覚園寺、京都では建仁寺・泉涌寺などがある。このうち建仁寺は張大帝を単独で祀り、覚園寺においては招宝七郎と張大帝を共に祀る。泉涌寺ではその号を「照烈大帝」とするが、これも張大帝である。いずれも伽藍神として扱われている。福井の永平寺では招宝七郎神と共に土地龍王神を配するが、これが張大帝か東海龍王かは判然としない。ところによっては単に伽藍神とだけし、張大帝とは認識していない寺院もある。

張大帝の姿は、だいたい笏を持って、中国の王侯風の衣冠を着けている場合が多い。手を差し上げるといった特徴を持つ招宝七郎神に比しては、やや個性が弱い。従って、その像の比定も難しい。覚園寺には「太帝」との銘文を有する像があり、これが張大帝を指すものと考えられる。このうち幾つかは無髯で笏を持つ。泉涌寺の大帝像は、髯のある姿となっている。江戸時代の禅僧無著道忠は『禅林象器箋』において招宝七郎など幾つかの伽藍神について考察を加えているが、張大帝についても詳細に検討している¹⁴⁾。

祠山張大帝は、もと帰宗寺の土地神である。蘭溪和尚と因縁があり、

建仁寺にてこれを祀り、その土地神としたものである。

(帰宗寺土地。与蘭溪和尚有因縁，建仁寺祀之，為土地神。)

道忠の考察によれば、次のような話が伝えられている。すなわち蘭溪道隆がまだ中国にいた時、ある異人と会ったが、その異人は「汝の縁は東方にあり」と預言して消え去る。ところが、その姿は後に見た帰宗寺に祀られる張大帝とそっくりであった。このことを不思議に思っていたが、さらに明州の天童寺にいたときまたこの異人が現れて、日本への船に乗るよう勧める。この異人は、やはりこの地に祀る張大帝の像とうり二つであった。この靈驗に感じた蘭溪和尚は、自分が伽藍を建てる時は、この神を土地の守護神として祀ると焼香して誓ったとする。

この話自体はもとより伝承にすぎないが、現在張大帝が祀られている寺院は、建仁寺・寿福寺・泉涌寺と、ほぼすべて蘭溪道隆と関係があった所である。祠山張大帝の渡来に当たっては、蘭溪道隆が一定の役割をはたしていることは、ほぼ間違いないと思われる。

その原因となった帰宗寺とは、廬山の帰宗寺を指すと考えられるが、これについて道忠は疑義を呈しており、或いはこれは天寧寺のことではないかとする¹⁵⁾。確かに張大帝の信仰の範囲を考えると、江西の帰宗寺よりは、常州或いは寧波の天寧寺の方がふさわしいかもしれない。しかしこれについては、現段階では確証は持てない。蘭溪道隆以外では、三山進氏は、また泉涌寺などにおける俊苜の影響についても指摘する¹⁶⁾。実際には蘭溪道隆以外にも、多くの渡来僧や入宋僧がこの神の伝来に関わっているものと推察される。

一方で日本から宋に渡った成尋は、当時の伽藍の神について、招宝七郎大権とさらに王子晋・東嶽大帝・五通神・白鶴靈王などを挙げている¹⁷⁾。しかしこの中には張大帝の名は見えない。招宝七郎神と張大帝が幾つかの寺で共に祀られることを考えると、これはやや奇異な感もある。

もっとも、鎌倉建長寺・福井永平寺・京都泉涌寺などにおいて伽藍とされる神を見ると、招宝七郎・掌簿判官・感應使者・監齋使者、それに張大帝があり、当時の伽藍神はもっと多種多様であったと考えられる。ただ招宝七郎神の場合は、現在でも阿育王寺にその像が残されているが、張大帝を寺院において祀ったものは確認できていない。この点については今後も調査を継続したい。

さて、日本において張大帝とその眷属の像を一番よく保存しているのは、恐らく泉涌寺と建長寺それに海蔵寺であると思われる。これらの寺院には、祠山張大帝のほかにも感應使者などの像もある。

感應使者は、『道法会元』に「報応大將軍」とされる方使者ではないかと思われるが、確証は無い。その像は槌と棒を持つのが特色であるとされる¹⁸⁾。

泉涌寺の仏殿の中を「土地堂」とし、五体の伽藍神を祀る。張大帝の脇に女性神らしき二像があり、他に立像が二体ある。立像のうちの槌を持つ一体は、恐らくは感應使者ではないかと思われる¹⁹⁾。古記録では、この五体を「照烈大帝・賀茂大明神・春日大明神・稲荷大明神・日吉大明神」とするようだが、その像容からすると、いかにも日本の神らしからぬ形である。女性神の一体は、訶利帝母であると考えられるが、衣冠はいかにも中国的である。九天玄女のような女性神とも考えられなくもないが、或いは張大帝の二夫人である可能性もある。

この他、幾つかの寺院に蔵する掌簿判官であるが、この神は一般的に筆と巻物を持っているのが普通である。或いは張大帝を中心に、感應使者と掌簿判官を従神としたものか。しかし、掌簿判官の役職は冥界における書記であり、むしろ東嶽大帝、或いは冥界の十王の配下なのではないかと考えられる。この神は『西遊補』第九回で、地獄において孫悟空に「善悪簿」を見せる役割で登場する²⁰⁾。やはり冥界における判官であると考えられていたようである。これからすると、張大帝の配下に掌簿判官が配されたも

のか、或いは時に「大帝」号を有する伽藍神には、張大帝の他に東嶽大帝があったかとも推察される。だが古記録に東嶽を伽藍とした例は成尋のものにしか無く、また像容も確認されておらぬため、これについては憶測の域を出ない。

監齋使者は道忠が「監護僧食之神」とする通りで²¹⁾、食堂などに祀られていることが多い。憤怒相に近い姿であるのが特色である。

三山進氏が論じている鎌倉海蔵寺の伽藍神像についても疑問が多い。その銘文には「大帝・修利菩薩・掌簿判官・感應使者」とある²²⁾。神像の一つは手を差し上げているので、これは招宝七郎すなわち修利菩薩と見なすことができる。もっとも、これは鎌倉覚園寺で「大権」と「修利」を分けるのとはまた矛盾する²³⁾。三山氏によれば、そもそも寺院では手を差し上げる方を「大元」と呼び、笏を持つ方は「修利」としているようである。であれば、銘文には招宝七郎大権は記されていないとするべきかもしれない。

さらに海蔵寺の像では、巻物を持つのが掌簿判官であり、立像の一つは台座名から感應使者であるとされる。残りの立像の一つは銘文に無く、そのため比定されていないようだが、恐らく監齋使者であろう。

鎌倉建長寺には、手を胸の前に揃えて、恐らく笏を持っていたであろう伽藍神が二体ある。このうちどちらが張大帝であるのは間違いないが、しかしいずれが張大帝かは非常に判定しにくい。海蔵寺の像の「修利」とあるものと、建長寺の一体はほぼ同じ姿であるが、覚園寺で「太帝」とされる像とは違う。現段階では、建長寺の五体は、張大帝・修利菩薩・感應使者・掌簿判官と、名称不明である一体であるとしか断定できない。

これとは別に、福建や台湾地区において祭祀される「伽藍爺」という神が存在する。また「伽藍尊王」という称号がある²⁴⁾。主神として祀られる他に、媽祖廟などに従神として配されることも多い。

しかし、この伽藍神の由来は不明確である。多くは現在最も有力な伽藍

神である関帝に結びつけて考えるようではあるが、その神像を見る限りでは、関帝と異なる神格であると考えべきであろう。これが張大帝であるとは断定しにくい、招宝七郎或いは華光神なども含めた伽藍神のいずれかであることは間違いないと思われる。恐らく七郎神や張大帝の場合、中国では伽藍としてみなされることが少なくなったために、その由来がだんだんと分からなくなっていったものであろう。

3. 水神としての張大帝

祠山張大帝は、『道法会元』にて水部の神として扱われるように、元来は水神として信仰されたものである。むろん中国の民間信仰の神は幾つかの性質を兼ね備えるのが普通であり、伽藍神であり火神でもある華光神²⁵⁾のような例は数多く存在する。

張大帝と共に伽藍神として祀られることの多い招宝七郎神は、同じく水神であるが、むしろ海神として祀られるのが普通である。この他、海神としては東海龍王や有名な媽祖神がある。とはいえ、海神と水神の区別は中国では曖昧で、多くの水神が海神としても機能する。龍は水と関係が深いため、水神や海神の多くはまた龍神としても扱われる。但し四川の二郎神のように、むしろ龍と対峙する者が水神となる場合もある。

古来、屈原や伍子胥のような水と深い関わりを持つ人物も水神とされた。伍子胥が水神として「威惠顕聖王」に封ぜられたことは、『三教搜神大全』などにも見えている通りである²⁶⁾。『三教搜神大全』には、他にもこの当時広く水神としての信仰があった蕭公爺爺や晏公爺爺についても記載がある²⁷⁾。蕭公爺爺と晏公爺爺は、長江を行き来する船の守護神として盛んに祀られたものであり、主として江西地方において信仰されていた。

このように水神は、江南地方では各地方で様々なものがあつたと推察される。しかしやはり浙江や福建のように海との関連が深い地方では、招宝七郎や媽祖神などが海神として強くなっていった。

先に見た蘭溪道隆の伝説においては、明州すなわちいまの寧波に張大帝の廟があったと述べられていた。むろんこれは単に伝承にすぎないかもしれない。寧波には招宝山があり、ここでは招宝七郎の信仰が有力であったと思われるが、他にも東海龍王の廟もあったようで、幾つかの水神が共に祭祀されていた可能性も高い。

紛らわしいのは、東海龍王の称号は「広徳王」であり、そして張大帝の称号も「広徳王」であることである。むろん東海龍王の称は、同じような号を持つ南海龍王が「広利王」であるように、抽象的な意味合いが強い。張大帝の「広徳」とは地名のことであるので、厳密にはたまたま称号が一致したと見なすべきであろう。ただ、この称号の一致が、時に両者の混同を招いている可能性はある。さらに招宝七郎も、張大帝との混同があるので、いっそうその区分けは困難である。鎌倉の諸寺院における伽藍神の名称の混乱は、こういった事情を反映している面もあると思われる。

結 語

かつて宋から明代にかけて盛大な信仰を有した祠山張大帝が、日本の寺院において伽藍神として祀られていることは、民間信仰の研究においてもあまり注意されてこなかった。中国本土で衰えた信仰が、まるで「文化遺産」のように残されているその像は、大変貴重なものと言える。しかも、張大帝のみならず、感應使者や掌簿判官などの神も付随して残されている。

しかしながら、こういった神像などを考察の対象とするには、甚だ困難が伴う。文献資料がほとんど残されていないからである。実際に建長寺や泉涌寺の神像については、小論では推察を重ねるばかりであり、どの像がどの神に当たるのか、確定することができなかった。ただ張大帝の信仰の実像については、今後とも文献資料と日本・中国双方における現地調査を重ねる必要があり、その過程で不明確な点は解消していくものと考えられる。

注

- 1) 周清原『西湖二集』(人民文学出版社・1989年) 248頁。
- 2) 『明史』礼志四・中華書局本1304頁, なおこの項目は, 台湾中央研究院・漢籍電子文献『二十五史』(<http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/>) の検索による。
- 3) 招宝七郎については, 拙稿「海神・伽藍神としての招宝七郎大権修利」(『白山中国学』通巻13号・2007年) 43~54頁を参照。
- 4) 『絵図三教源流搜神大全(外二種)』(上海古籍出版社・1990年) 118~119頁。なお, これと『陔余叢考』などの記載については, 呂宗力・樂保群『中国民間諸神』(河北人民出版社・改訂版・2001年) の466~471頁も参照している。
- 5) 周秉綉編・周憲敬重編『祠山志』(『中国道観志叢刊統編』第8巻・広陵書社・2004年) 103~106頁。
- 6) 趙翼著・樂保群・呂宗力校点『陔余叢考』(河北人民出版社・2003年第二版) 728~730頁。
- 7) 『李卓吾評本西遊記』第五十二回(上海古籍出版社・1994年) 697頁。
- 8) 前掲趙翼『陔余叢考』728頁。
- 9) 『宋史』中華書局本10025頁(前掲台湾中央研究院漢籍電子文献『二十五史』による)。
- 10) 『道法会元』(『正統道蔵』正一部 S. N. 1220)。
- 11) 前掲『祠山志』193頁。
- 12) 前掲『絵図三教源流搜神大全』121頁。
- 13) 佐々木章格「日本曹洞宗と大権修理菩薩」(『曹洞宗宗学研究所紀要』創刊号・1988年) 32~45頁, 中世古祥道「招宝七郎大権修理菩薩について」(『宗学研究』35号・1993年) 232~237頁, 三山進「伽藍神像考——鎌倉地方の作品を中心に——」(『MUSEUM』第200号・1967年) 12~27頁, 及び田中知佐子「建長寺伽藍神像の源流について」(第56回日本道教学会大会・2005年・専修大学における発表) 要旨は『東方宗教』第107号・2006年・94頁に採録。
- 14) 無著道忠『禅林象器箋』(柳田聖山主編『禅学叢書』中文出版社・1990年) 181~187頁。
- 15) 前掲無著道忠『禅林象器箋』184頁。
- 16) 前掲三山進「伽藍神像考——鎌倉地方の作品を中心に——」25~26頁。
- 17) 王麗萍「入宋僧成尋と道教」(勉誠出版『アジア遊学』第73号・2005年) 130頁。

- 18) 前掲三山進「伽藍神像考——鎌倉地方の作品を中心に——」20頁。
- 19) 赤松俊秀編集代表『泉涌寺史』（法蔵館・1984年）363～365頁，また前掲三山進「伽藍神像考——鎌倉地方の作品を中心に——」20頁によれば，東福寺にも槌を持つ感応使者像があった。
- 20) 董若雨『西遊補』（世界書局・1969年）177頁。
- 21) 前掲無著道忠『禅林象器箋』167頁。
- 22) 前掲三山進「伽藍神像考——鎌倉地方の作品を中心に——」21頁。
- 23) これについて詳しくは，拙稿前掲「海神・伽藍神としての招宝七郎大権修利」を参照。
- 24) 鍾華操『台湾地区神明的由来』（台湾省文献委員会・1979年）100頁。
- 25) 拙稿「萬福寺伽藍堂の華光菩薩像について」（『黄檗文華』第122号・黄檗山萬福寺文華殿黄檗文化研究所・2003年）120～124頁を参照。
- 26) 前掲『絵図三教源流搜神大全』115～116頁。
- 27) 前掲『絵図三教源流搜神大全』342～344頁。

付記：小論は2006年度文部科学省科学研究費・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」の民俗信仰班（「浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査」研究代表者・二階堂善弘：課題番号17083038）による成果の一部である。